

椎名麟三全集

15

評論
2

冬樹社

椎名麟三全集15

昭和四十九年三月十五月初版第一刷発行

著者―椎名麟三

発行者―高橋直良

発行所―冬樹社 東京都千代田区神田神保町二―一八

電話東京二六四―〇三四六 振替東京七七五七

印刷所―三容堂印刷株式会社

製本所―一重製本株式会社

装幀―栃折久美子

写真―田沼武能

定価―三〇〇〇円

© Rinzo Shiina 

0391-02015-5190

第十五卷目次

I

私の小説体験	5
昨日から明日へ	14
なぜ作家になったか	17
なにをいかに描くか	24
現代文学の創作方法	39
訴えたいことをどう描くか	46
自分というもの	65
私の小説作法	69
私の文章について	73
映画「煙突の見える場所」によせて	79

映画監督論	81
映画と文学	85
単純な合理化からの脱出を	89
「大阪の宿」を中心に	92
映画と文学の間	98
五所平之助氏とキャラメル	101
文学と映画との関係	104
創造とユーモア	109
村山知義「死んだ海」	131
松井桃楼「蟻の街の奇蹟」	133
安部公房「制服」	135
安部公房「どれい狩、快速船、制服」	137
II	
マグダラのマリア	141

「鶏はふたたび鳴く」について	159
小説マタイ伝	
羊飼いの反逆	165
災 難	174
星と夢	180
賭はなされた	187
サタン氏の告白	194
ゼベダイの網	202
監房の中で	209
灯は隠れることはない	216
おきて	222
企 て	228
情 欲	235
誓 い	242

悪人	250
木賃宿	257
ある女優の話	265
マルタの恋	272
問題の核心	281
真珠	296
寺の弓術	304
岩の門	311
情状酌量せず	320
私の聖書物語	
処女受胎	335
愛と律法	346
まぼろしの門	355
人間に原罪はあるか	364

海の上を歩くキリスト	372
ゴルゴタの丘	382
キリストの手と足	393
神のユーモア	400
人間性の回復	408
愛の不条理	416
生きるということ	426
神と人	432
III	
私の十代	445
古き神の再来拒否	447
私のペンネーム	449
誤解	450
「ニヒッてる」人生からぬけでるために	453

かぼちゃの花	460
わが夢を語る	466
文学・映画・演劇	471
「第三の証言」のこと	473
「終電車脱線す」のこと	475
生と死の谷間を歩いて	477
新劇について	492
作者の言葉	493
「恰もあるが如くに」について	494
俳優的人間	496
作者の言葉	499
冗談について	501
悪い結婚よりは良い婚約	505
純粹さについて	512

解 解

題 說

竹内泰宏

竹内泰宏

評論 2

私の小説体験

ここで私は、私の作品の意図とか、創作のヒントとかについてではなく、文学一般論的な立場からの小説体験——一人の人間の人生観の変遷がいかにその人間の文学を決定したか？——について述べたいと思う。私は二十八歳で文学に目がひらかれた。ドストエフスキーの「悪霊」に憑かれた。そして初めて小説を書くように思った。それで文学の勉強をはじめたのである。

私は家庭的な事情で十六歳のとき家出をした。小売員、出前持ち、不良少年……と家出少年が辿る途を順調に辿ってきたが、母の自殺未遂を新聞で知り、郷里に帰った。

そして交通労働者（現山陽鉄道）になったのであるが、この頃は、こうした経歴からくる社会への単なる反抗心だけがあった。それを左翼的文献（マルクス、レーニン、ブハーリン等の）で理論的に武装するようになった。

私は三重の生活をしなければならなかった。労働者としての実生活、読書、非合法組合の組織者としての

……。私は入党し、検挙され、転向しなかったため、四年の刑を受け控訴して未決へ入った。

この時に、内面的な一事件が私に決定的なものをもたらしたのである。

独房の日々、私はモップルから差入れられてくる本を読んで暮したのであるが、その時、「自分の仲間が、もし死刑を宣告されたら、自分は代って死んでやるのが出来るだろうか？」ということを（その時は）一心になって考えた。その頃の私は、自己に対する問い、一般は結局において「否定的な答」しか出てこないという精神のカラクリを解していなかったのである。

故に、答は「否！」であった。多くの自己弁解をつけても、「自分は誰かのために死ぬことは出来ない」という事実を否むことは出来なかった。私は自分が配膳夫（既決囚たち）とすこしも異っていないことを感じた。

（何のために自分は運動を続けてきたか？）

自分のために、自分の自由のために、自分の権力のために、である。

（自分自身の愛に誤解があった）と思うと同時に、（自分は階級的に裏切りを行なった）という感じを味わった。自分はニヒリズムに墜ちた。その時、モップルから廻されてきた、ニーチェの「この人を見よ」に出会った。人間は権力意志である。それを恥じることはない。むしろ誇りとしてよい、ということが書かれてあった。

それから、私は転向上申書を書いた。

私はニヒリズムの克服をくだてて、ニーチェからはじめて、ディルタイ、ベルグソン、キルケゴール、ヤスパース、ハイデッガー等を読んだが、そのいずれによっても自分を陥れているニヒリズムから脱出する

ことは出来なかった。

たとえば「ツアラトゥストラ」の「真昼」でさえも空虚としか感じられなかった。生の充実を感じないで却ってニヒリズムを感じるといふ風だった。

ヤスパースの「哲学的信仰」でも逆に、私は単なる空虚しか感じとることは出来なかった。

こうして私は（この人生に決定的な答も救いもない）という答をはじめから抱いて文学に入っていた。貧乏から来る自殺の強迫に対して、その強迫を支える精神的なものがなかった。いまから思えば、危険な日を送っていた。

私は新瀉鉄工所へやっと入り、真面目な社員として勤めた。

私は退屈まぎれにニーチェの賞めている三人の作家の作品を読んだ。

シュティフターの短篇はきびしい美しさを持っていたが、労働者上りの自分には入ってゆけない世界であった。これは自分には無縁だと思った。

エッケルマンの「ゲーテとの対話」については、エッケルマンのゲーテに対する卑屈な態度に腹が立つてならなかった。

最後に冒頭にのべたドストエフスキーの「悪霊」にぶつかったのだ。

私は吃驚した。（小説とはこういうものだったのか！）それまで私は小説を軽蔑していた。運動中に、左翼の小説を読んだことがあるが、共感がわかなかったからだ。それは作家がインテリであるためか、教えられることはあっても、生活感情が相通じて来なかった。